



- 4 厄病を白石から追い出せ！
- 5 大人も子どももみんなで大行列
- 6 白石の神送りを次世代へ繋ぐ
知りたくなる神送りの魅力
- 7 若者たちが頑張ります！
神輿を担いで、送り出す



白石の神送りを受け継ぐ意義は、単に昔の風習を残すことだけではありません。行事を通して、地域の歴史や人々の祈り、支え合いの心を次の世代へ伝えていく大切な役割があります。少子高齢化が進み、地域行事の継承が難しくなる中でも、住民が協力して守り続けていること自体が、大きな地域の力となっています。こうしたことから、白石の神送りは、単なる伝統行事や観光行事ではなく、地域の貴重な民俗文化財として、大切に受け継がれています。

ではの強い結び付きが感じられます。行事は特定の人だけでなく、地域の人々が力を合わせて支えており、白石地区の共同体の象徴ともいえる存在です。近年、感染症への関心が高まる中で、無病息災を願うこの行事の意味も改めて見つめ直されています。

誇る文化を後世へ 渡邊 均さん

白石地区の「神送り」は、現在では全国的にも数少ない貴重な伝統行事であり、地域の歴史や文化を今に伝える大切な文化財です。地域の人々によって守り続けられ、白石地区にとって大きな誇りでもあります。

しかし近年は、人口減少や少子高齢化の影響により、行事に参加する大人や子どもの数が年々減少しているのが現状です。

だからこそ、私たちは大切な文化を次の世代、そして後世へ受け継いでいくために、若い人たちへ伝統の価値や意味を伝え、地域全体で支えていくことが必要です。先人たちが守り続けてきた神送りを、未来へ繋いでいきたいと考えています。



白石の神送りの歴史と由来

白石の神送りの起源は、江戸時代中頃の享保年間（1716〜1736年）にまでさかのぼると伝えられています。

当時、白石地区では疫病が流行し、多くの村人が高熱に苦しめられていました。その際、村を訪れた旅の僧侶の教えによって始められたのが、この「白石の神送り」であるといわれています。また、この僧侶は、炒った大豆を紙に包み、病人の体をなでて病を払う方法も伝

えとして残されています。かつて、祭日は5月初丑の日とされ、数名の当番役と子どもたちを中心に行われていました。しかし、少子化の影響により行事の継承が難しくなってきたことから、平成7年より祭日を5月第2日曜日に変更し、地域の大人たちにも参加を呼びかける形へと改められました。現在では、白石地区をあげて多くの住民が参加するにぎやかな行事となり、地域の伝統文化として大切に継承されています。